

## 熊本の加工用バレイショについて

有限会社みどりライスセンター 代表 上原泰臣

弊社は、熊本県の県北、福岡県との県境の中山間地で活動している農業法人で、農産物生産と稲作の作業受託を行っています。生産品目は、米、飼料用米、バレイショ、カンショ、かぼちゃ、キャベツ、大根、サトイモ等の露地物ばかりです。ほとんどが播種前契約をしており、販売単価と大まかな出荷量を決めることで、計算ができる農業をしています。播種前契約で面積が決まると、肥料や農薬等の資材も計画的購入が可能となり、販売単価を基準にして、経費削減と単収をあげることで、収益を伸ばせるようになります。また、1年を通じた計画的な生産によって労働力分散と雇用もできるようになります。

農産物のなかでも、経営の中心は、加工用バレイショです。年々面積を増やし、2017年は15haまで拡大しました。なぜ、熊本でバレイショなのかというと、水稻の裏作として水田をうまく活用できるからです。気候も合うため県全体でも、生産面積は拡大しているようです。また、バレイショは栽培作業がほとんど機械化しており、少人数で大きな面積を栽培できます。18年からは農薬散布にドローンの活用も始めています。

加工用の契約では、バレイショを収穫して、すぐ出荷できる点が大変ありがたいです。基本的なことですが、九州産は北海道産と違い、貯蔵に向きません。栽培中に温度が段々上昇するので成長が早い分、悪くなるのも早いようです。以前行っていたバレイショの青果用出荷では、200トンの出荷を行うのに選別と箱詰めが40日もかかり、低温倉庫に入れたにも関わらず、約20%も廃棄がでていました。

加工用出荷では、Mサイズ以上をまとめ1.5トンの大型コンテナで出荷することで、サイズごとに選別したり揃えたりする作業時間を大幅に短縮しました。もちろん単価は青果用よりも安いのですが、毎年同じ単価で契約するので計画が立てやすく、収量増加と経費削減に専念して、安心して栽培できるのがいいですね。

もともと弊社では加工用カンショの栽培をしていたので、面積当たりの作業時間を出来るだけ減らして、効率よく栽培することに慣れていました。外国人実習生を多く受け入れていたので、丁寧にゆっくりする仕事より、多少雑でも早く終わることができる仕事のほうが教えやすい面もあります。価格にこだわるよりも、安定的に取引して確実に収益が得られる方が良く考え、バレイショは青果用から加工用に変えました。

これまで、地域農業との関わりを中心とした経営を行ってきたなかで、後継者が減り、耕作地が荒れていく現状を目の当たりにしています。少しでも耕作放棄地を減らし、地元の方を雇用するため、あえて土地利用型の農業を行い、地域の生産者と連携して農産物のブランド化も行ってきました。これらは県が進めている農業塾や農業経営同友会、法人協会等、様々な農業団体に所属して関係を持つことで、情報を得た結果だと思っています。異常気象や災害が常態化しつつある現在、様々なリスクを回避するためにも、情報を早くとり入れて活かしていくことが、農業にも必要だと思います。

(うへはら やすおみ)